

後深草 一九一六 康元元年

原中最秘抄(源親行)
源親行存生
源氏官名和歌(藤原爲家)

四

後宇多 一九三五 建治元年

藤原爲家歿
弘安源氏論義成

一三五

伏見 一九四〇 弘安三年

久明親王將軍宣下
賦光源氏物語詩成

四一

花園 一九四九 正應二年

紫明抄(釋素寂)將軍久明親王(献上)

一二五

一九五〇 正應四年

原中最秘抄增補(源親行—義行)

四

南北朝時代

後光嚴 一九五四 永仁二年

原中最秘抄增補(源親行—義行—行阿)

四

後龜山 二〇三九 康曆元年

源氏物語抄出(僧觀意筆)

七六

二〇四一 弘和元年

河海抄(四辻善成)成

五

二〇四六 至德三年

仙源抄(長慶院)成

四九

後小松 二〇四八 嘉慶二年

四辻善成源氏談義開始

六

二〇四八 嘉慶二年

源氏物語千鳥抄(平井相助)成

六

室町時代

二〇五六 應永三年

仙源抄奥書

四九

二〇六八 應永十五年

源氏六帖抄(相月德翁)成

六

同

源氏六帖抄增補

六

稱光 二〇七九 應永廿六年

源氏物語千鳥抄大内持世(献上)

六〇

源氏小鑑(藤原長親)將軍義持(進上)

室町時代

一四九

二〇八三 應永二十年

一將軍義持罷亡

→ 仙源抄を藤原長親繕寫す

後花園 二〇八九 永享元年

← 藤原長親歿

二〇九一 永享三年

類字源語抄(竺源惠梵)成

二〇九二 永享四年

源氏物語提要(今川範政)成

同 同

→ 紫明抄増補今川範政書寫

二二〇〇 永享十二年

一滴集(釋正徹)成

二二〇六 文安三年

光源氏勘用集奥書

二二〇九 文安六年

山頂湖面抄(祐倫)成

同 寶徳元年

源氏和秘抄(一條兼良)成

二二一〇 享徳二年

源氏物語年立(一條兼良)成

後土御門 二二三一 文明三年

源氏口傳(一條兼良)成

二二三二 文明四年

花鳥餘情(一條兼良)成

二二三五 文明七年

種玉編次鈔(宗祇)成

二二三六 文明八年

花鳥餘情大内政弘へ進上

同 同

弄花抄(牡丹花宵柏、逍遙院實隆)成

二二三七 文明九年

源語秘訣(一條兼良)成

同 同

源氏物語不審條々(一條兼良)一部成

同 同

弄花抄再訂

二二三九 文明十一年

續類字源語抄(法眼紹永)成

二二四〇 文明十二年

花鳥餘情龍翔院書寫

同 同

源氏口傳將軍足利義尙へ進上

同 同

口傳抄(一條兼良)成

同 同

源氏物語不審條々(一條兼良)成

不審抄出(一條兼良應問)

→ 源語裝束抄(一條兼良應問)

室町時代

一五一

四四

七

八

四二

四四

八

五〇

七

四三

四三

四三

四五

八五

四七

五〇

六三

五

七

六八

二四

七

九六

四三

七

源氏物語研究書目年表

一一四一	文明十三年	揚名問答(一條兼良應問)	四七
一一四三	文明十五年	一條兼良歿	
一一四五	文明十七年	源氏物語故實(堯忠)成	一〇三
一一四六	文明十八年	雨夜談抄(宗祇)成	三四
一一四八	長享二年	源氏物語聞書(逍遙院實隆)成	九
一一四九	長享三年	源氏物語系圖(逍遙院實隆)成	九七
一一五〇	延德二年	弄花抄三訂	八
同	同	源氏不審抄(光源氏物語秘曲)書寫	四二
一一五一	延德三年	源氏要解(飛鳥井榮雅)	六七
一一五四	明應三年	飛鳥井榮雅歿	
一一五五	明應四年	源語花錦抄(牡丹花宵柏)成	七七
		揚名問答書寫	四七
		一葉抄(牡丹花宵柏)成	九

後柏原

一一六〇	明應九年	花鳥餘情抄出(宗祇)	七
一一六二	文龜二年	源氏物語不審抄(宗祇)	四五
一一六五	永正二年	源氏增鏡(宗祇)	一二四
一一六九	永正六年	宗祇歿	
一一七〇	永正七年	源氏物語聞書(逍遙院實隆)再訂	九
同	同	源氏物語抄(猪苗代兼載)	一四
同	同	猪苗代兼載歿	
同	同	弄花抄增補	八
同	同	源氏物語年立一條冬良奧書	九六
一一七二	永正九年	源氏物語系圖奧書	九七
一一七三	永正十年	源氏物語聞書三訂	九

室町時代

源氏物語研究書目年表

同 同

遣遙院實隆の源氏談義

一五四

源氏物語註傳一條冬良書寫

九

花鳥餘情別勘一條冬良書寫

八

一條冬良菟

四二

二二七四 永正十一年

源氏男女裝束抄(月村齋宗碩)成

八五

二二七七 永正十四年

弄花抄三條西實隆書寫

八

二二七九 永正十六年

紫塵愚抄(柴屋軒宗長)尊俊書寫

七六

二二八二 大永二年

源氏物語繪卷(光信)

一三〇

二二八五 大永五年

土佐光信歿

後奈良

二二八七 大永七年

林逸抄(牡丹花宵柏聞書、林宗二)

一四

二二八八 大永八年

細流抄(稱名院公條)成

九

→薄紫(柴屋軒宗長)

一三

二二九二 享祿五年

紫塵愚抄(柴屋軒宗長)

七六

同 天文元年

柴屋軒宗長歿

六七

二二九三 天文二年

源氏要解(飛鳥井榮雅)奥書

一三

二二九四 天文三年

宗碩抄(月村齋宗碩)

九

二二一〇 天文十九年

月村齋宗碩歿

一二

同 同

細流抄再成

九六

二二一五 弘治元年

休聞抄(里村昌休)成

一二

正親町

二二一九 永祿二年

源氏物語系圖藤華宋央奥書

四五

二二二〇 永祿三年

源氏雜亂抄奥書

一二五

同 同

三條西公條源氏談義

五一

同 同

水滴色葉類聚抄(三光院實澄)成

一二五

室町時代

源氏物語竟宴記(九條植通)成

一五五

源氏物語研究書目年表

一一二二一	永祿四年	
一一二二四	永祿七年	源氏系圖奥書
一一二二五	永祿八年	源氏物語抄奥書
一一二二六	永祿九年	源氏供養附百韻(義俊親王)成
一一二二七	永祿十年	源氏聞書(新納忠元)成
同	同	源氏目錄の和歌(飛鳥井榮雅書寫)轉寫
一一三三一	元龜二年	覺勝院抄(覺勝院)成(?)
		一〇
		一二四
		一二二
		一一五
		一八
		九七

戰國時代

一一三三四	天正二年	源氏物語三箇大事切紙(三光院實澄)
一一三三五	天正三年	源氏物語發端聞書成
同	同	孟津抄(九條植通)成
		一一〇
		一〇五
		一一

同	同	萬水一露(能登永閑)成
		一一
		一〇
		一〇

後陽成

一一三三九	天正七年	三光院實澄歿
一一三四〇	天正八年	明星抄(三光院實澄)
一一三四二	天正十年	紹巴抄(里村紹巴)成
一一三五一	天正二十年	光源氏物語竟宴之會(九條禪閣、松永貞徳)
一一三五二	天正二十年	光源氏勘用集奥書
一一三五四	文祿三年	源氏物語抄(里村玄仍)成
		一三
		一三
		一七
		一七

→ 源氏物語辨(中院通勝、細川幽齋)
 一七
 一七
 一七
 一七

徳川時代

徳川時代

一一二五八	慶長三年	岷江入楚(中院通勝)成
		一七

源氏物語研究書目年表

一二六一	慶長六年	源氏物語抄奥書	一八
一二六三	慶長八年	源氏物語抄奥書	一八
一二六四	慶長九年	花屋抄(慶福院花屋玉榮)(?)	一四
一二六九	慶長十四年	玉榮集(慶福院花屋玉榮)成	一〇五
一二七〇	慶長十五年	源氏物語抄箋	一七
同	同	源氏小鑑刊	六〇
同	同	源氏物語註(細川幽齋)	一六
同	同	細川幽齋歿	
一二七五	元和元年	源氏無外題紹之奥書	六四
一二八四	元和十年	源氏の義成	一〇八
一二八七	寬永四年	源氏物語聞書(中院通村、通純等)	一九
明正	二二八九	源氏物語拔書(智仁親王)	八一
	寬永六年	智仁親王薨	

後光明

二三〇二	寬永十九年	源氏拔書奥書	六五
二三一〇	慶安三年	源氏物語(山本春正)刊	一九
同	同	源義辨引抄(一華堂切臨)成	一九
同	同	源氏解刊	一〇八
二三一一	慶安四年	源氏物語聞書(中院通村、通純等)	一九
同	同	源氏小鑑刊	六〇
二三一二	承應元年	萬水一露松永貞徳跋	一二
二三一三	承應二年	源氏物語聞書(松永貞徳)	一八
二三一四	承應三年	松永貞徳歿	
二三一六	明曆二年	源氏物語(山本春正)刊	一九
二三一七	明曆三年	十二源氏袖鏡刊	六四
同	同	明星抄(三光院實澄)刊	一〇
同	同	源氏小鑑刊	六一

德川時代

源氏物語研究書目年表

同	同	源氏物語諸抄年月考(林道春)	一〇二
同	同	林道春歿	
二三一八	萬治元年	源義辨引抄(一華堂切臨)刊	一九
同	同	源氏無外題定勝奥書	六四
二三一九	萬治二年	十二源氏袖鏡刊行	六四
同	同	源氏綱目(一華堂切臨)成、刊	六八
二三二〇	萬治三年	源義辨引抄(一華堂切臨)刊	一九
同	同	源氏物語表白刊	二二一
同	同	源氏鬢鏡刊	一三二
二三二一	萬治四年	十帖源氏(野々口立圃)刊	六八
同	寬文元年	弘安源氏論義刊	四一
同	同	←をさな源氏(野々口立圃)刊	六九
二三二三	寬文三年	萬水一露(能登永閑)刊	一一

二三二四	寬文四年	訂正源氏物語抄北村季吟奥書	六一
二三二六	寬文六年	源氏聞書(後水尾院)成	二〇
同	同	源氏小鑑刊	六一
二三二八	寬文八年	弘安源氏論義刊	四一
二三三〇	寬文十年	をさな源氏(野々口立圃)刊	六九
二三三二	寬文十二年	源氏增鏡(宗祇)刊	二四
二三三三	延寶元年	首書源氏物語(釋子眞)刊	二一
二三三五	延寶三年	源氏物語湖月抄(北村季吟)刊	二一
同	同	源氏小鑑刊	六一
二三三七	延寶五年	源氏箱入日記書寫	一〇六
二三三九	延寶七年	窺源抄(石出常軒)起稿	二二
二三四〇	延寶八年	窺源抄成	二二
同	同	源語秘訣(一條兼良)刊	四二

徳川時代

源氏物語研究書目年表

一六四

二三六六	寶永三年	首書源氏物語(釋子眞)刊	二一
同	同	源氏道しるべ(素兄堂)刊	六九
二三六七	寶永四年	源氏大和詞刊	五四
同	同	若草源氏(梅翁)刊	八九
二三六八	寶永五年	雛鶴源氏(梅翁)刊	八九
中御門 二三六九	寶永六年	紅白源氏(梅翁)刊	八九
		源氏外傳中院通茂潤色	二二
		源氏物語講釋(中院通茂)	二〇
		中院通茂歿	
二三七〇	寶永七年	俗解源氏(梅翁)刊	八九
同	同	源氏一簣抄(堀河悠見子)起稿	二三
二三七二	正徳二年	源氏繪寶枕刊	一三三
二三七三	正徳三年	源氏物語詞書(靈元院)成	七九
二三七四	正徳四年		

徳川時代

一六五

同	同	新橋姫物語(きし女)刊	九〇
二三七五	正徳五年	源氏そこのしとき(大橋長廣)成	二二
同	同	源氏物語詞書(靈元院)奥書	七九
二三七六	正徳六年	源氏一簣抄(堀河悠見子)成	二三
二三七七	享保二年	源氏男女裝束抄(月村齋宗碩)刊	八五
二三八一	享保六年	若草源氏(梅翁)刊	八九
同	同	雛鶴源氏(梅翁)刊	八九
同	同	紅白源氏(梅翁)刊	八九
同	同	俗解源氏(梅翁)刊	八九
同	同	紫文蚤之囀(多賀半七)成	九一
二三八三	享保八年	紫文蚤之囀(多賀半七)刊	九一
同	同	源氏の題(使用謠)刊	二六
		→源氏詞要(靈元院)	五四

源氏十二月詞書(靈元院)	七九
源氏物語拔書(靈元院)	八一
靈元院崩	三八
源氏桐壺大概(天野信景)	三八
天野信景歿	八六
源氏官職故實秘抄(壺井義知)	一一九
壺井義知歿	九〇
源氏掌故(有賀長伯)	一三九
有賀長伯歿	一三九
若草源氏(梅翁)刊	一三九
源氏物語繪抄(松井文正祐孝)成	一三九
伏屋塵 後水尾院)書寫	四六
俳諧源氏(建部綾足)成	九一

二三九二 享保十七年

二三九三 享保十八年

櫻町 二三九五 享保二十年

二三九七 元文二年

二三九八 元文三年

二四〇〇 元文五年

二四〇四 延享元年

桃園 二四〇九 寛延二年

二四一一 寛延四年

同 寶曆元年

二四一四 寶曆四年

二四一八 寶曆八年

後櫻町 二四二二 寶曆十二年

二四二三 寶曆十三年

同 同

二四二六 明和三年

徳川時代

源氏小鑑刊

源語圖鈔(山本正臣)

山本正臣の増補元明史略成

清雅源氏物語(西川祐信)

西川祐信歿

源氏物語新釋(賀茂真淵)成

桐壺考(賀茂真淵)

源語詰(五井純禎)

五井純禎歿

紫文要領(本居宣長)成

源氏文字ぐさり刊

源氏小鑑刊

源氏詞書琴基書畫(家仁親王)

六一

一三四

一三三

三四

五四

一〇六

一二二

六一

八〇

一六七

二四二七	明和四年	一家仁親王薨	三五
二四二九	明和六年	雨夜物語だみ言葉(加藤宇萬伎)成	三五
同	同	源氏三秘事之辨詞(賀茂眞淵)	四七
同	同	賀茂眞淵歿	
同	同	紫語素註(村上影面)	
同	同	村上影面の古今集和歌助辭分類成	
同	同	源氏物語四海入海(釋興隆)	一四二
同	同	源氏物語探海鈔(釋興隆)	一四二
同	同	源氏秘傳錄(釋興隆)	一四二
同	同	釋興隆歿	
後桃園 二四三一	明和八年	源氏物語先入御抄成	三五
同	同	源氏花鳥芳囀(土肥經平)成	一〇九
二四三五	安永四年	源氏物語他四種秘傳(長谷川春雅)書傳	四六

光格

徳川時代

二四三七	安永六年	雨夜物語だみ詞(加藤宇萬伎)刊	三五
二四三八	安永七年	源氏卷次第文字鎖(後陽成天皇)刊	一一二
同	同	長雄源氏かな文章刊	一一三
光格 二四四〇	安永九年	昌伯源氏註(里村昌伯)	一二四
二四四一	安永十年	里村昌伯歿	
二四四四	天明四年	源氏ひとりごと(伊勢貞丈)成	一〇九
同	同	源語梯刊	五五
同	同	源氏物語解帶木卷(萩原宗固)	三五
同	同	萩原宗固歿	
二四四五	天明五年	源語梯辨(中井竹山)成	五五
同	同	紫文紅筆(橋たか女)成	一一〇
同	同	源氏百人一首錦織(北尾重政)刊	一三四
二四四八	天明八年	雅俗繪源氏(北尾重政)刊	一三四
徳川時代			一六九

源氏物語研究書目年表

二四五一	寛政三年	雅情濃粧源氏物語(寺井重房)刊	二三五
二四五二	寛政四年	源氏導藤抄(源島麻呂)成	二四
二四五三	寛政五年	源氏物語玉の小櫛(本居宣長)起稿	二四
二四五五	寛政七年	源氏名寄文章刊	一一三
二四五六	寛政八年	源氏物語玉の小櫛(本居宣長)成	二四
同	同	→源氏年紀考附年立圖說(本居宣長)	九九
同	同	←源氏鈴の色首(本居宣長)	二五
二四五七	寛政九年	掌中源氏物語(尾崎雅嘉)刊	五五
二四五八	寛政十年	百瀬源氏名寄刊	一一二
二四五九	寛政十一年	源氏物語玉の小櫛(本居宣長)刻成	二四
同	同	源氏物語大意(釋祖能)	一一六
同	同	←釋祖能の新勅撰和歌集刊	八五
二四六〇	寛政十二年	源氏男女裝束抄(月村齋宗碩)刊	八五

同	同	→源氏物語演說抄(石野廣道)	一四〇
同	同	源氏物語說(石野廣道)	三四
同	同	石野廣道歿	
二四六一	享和元年	源氏物語消息文集稿(服部菅雄)成	八二
同	同	←源氏物語抄(服部菅雄)	八二
同	同	→源氏物語不審言(本居宣長、藤井高尙問答)	四七
同	同	←本居宣長歿	
二四六三	享和三年	雨夜閑話(葛西因是)成	一一〇
二四六五	文化二年	清石問答(清水清臣)成	四七
二四六七	文化四年	源氏物語不拂塵(本多忠憲)成	五五
同	同	紫文消息(橋本稻彦)刊	八三
同	同	詠源氏物語和歌(上田秋成)刊	一二七
二四七一	文化八年	日本紀御局の考(藤井高尙)刊	一一三

徳川時代

孝明 二五〇六 弘化三年

同 同
同 同
同 同
同 同
同 同
二五〇一 天保十二年
二五〇四 弘化元年
同 同
同 同
同 同

雨夜閑話(葛西因是)西澤仲舒跋
葵の二葉(堀内昌郷)成
源氏百人一首(里澤翁滿)刊
源氏竟宴和歌(松平榮子)成
←底の玉藻(堀内昌郷)成
二藍源氏(淺草庵春村)刊
掌中源氏物語年立(山田常典)刊
掌中源氏物語系圖(山田常典)刊
←光源氏物語大意(搬柴)
→源氏物語麻袋(榎並隆璉)
榎並隆璉歿
→源氏物語類語(岸本由豆流)
岸本由豆流歿

一七六
一一〇
一一〇
一一八
一二七
一一一
一二八
一〇〇
一〇一
一〇四
五八
五六

二五〇七 弘化四年

同 同
二五〇八 弘化五年
同 嘉永元年
同 同

徳川時代

二五〇九 嘉永二年
二五一一 嘉永四年

→源氏類聚抄(松岡行義)
→源氏圖抄(松岡行義)成
→源語類聚抄(小山田與清)
→源氏物語目次(小山田與清)
→源氏物語目錄(小山田與清)
→小山田與清歿
源氏物語賤の苧環(桑原如則)成
雨夜閑話(葛西因是)書寫
→源語問答(松岡行義)
→松岡行義歿
→源氏三箇秘事辨考(橋守部)
→橋守部歿
源氏鄙詞(白杵梅彦)成

一三七
一三七
五九
五九
五九
五九
九二
一一〇
八六
四七
九二

源氏物語研究書目年表

二五一四	嘉永七年	源氏物語評釋(萩原廣道)成、刊	一七八
二五一五	安政二年	源氏會讀抄(石橋眞國)	二七
		石橋眞國歿	三七
		源氏物語年立考(本居内遠)	一〇二
		本居内遠歿	
		源氏空蟬卷(千葉葛野)	三九
		千葉葛野歿	
二五一六	安政三年	源氏物語俚諺解(佐佐木弘綱)起稿	二七
		源氏物語類語(足代弘訓)	五七
		足代弘訓歿	
二五一七	安政四年	源氏物語俚諺解(佐佐木弘綱)成	二七
二五一八	安政五年	源氏紐鏡(源匡平)成	一一一
		源氏帶卷(荒木田久守)	三九

同	同	荒木田久守歿	
二五一九	安政六年	源氏紐鏡(源匡平)刊	一一一
		源氏難語抄(齋藤彦麻呂)	五八
		齋藤彦麻呂歿	
		源氏爪印(黒澤翁滿)	五九
		黒澤翁滿歿	
同	同	源氏物語評釋(萩原廣道)餘釋刊	二七
二五二一	文久元年	さとし源氏寫眞鏡(太平館若本)刊	一二八
同	同	源語歌集(高田宣和)成	一一八
明治 二五二七	慶應三年	掌中源氏物語年立(横山由清)成	一〇一
二五二八	慶應四年		

明治時代

徳川時代

源氏物語研究書目年表

同 明治元年

←京紫源氏茅(村山春豊)刊

一三六

二五三一 明治四年

→源氏物語評註(野々口隆正)

一四〇

野々口隆正歿

→源氏物語類語詳解(富樫廣蔭)

五八

源氏物語大意抄(富樫廣蔭)

七一

二五三三 明治六年

富樫廣蔭歿

→源語奥旨(近藤芳樹)刊

一一一

二五三六 明治九年

英譯源氏物語(末松謙澄)刊

九五

二五四二 明治十五年

源氏物語講義(鈴木弘恭)刊

二八

二五四四 明治十七年

源氏物語拔萃(鈴木弘恭)刊

八三

同 明治廿一年

新編紫史(増田千信)第一卷刊

九三

二五五〇 明治廿三年

源氏物語考證釋圖(有住齋)成

一三七

同 明治廿三年

日本文學全書本源氏物語刊

三三二

同 同

國文全書本源氏物語湖月抄(小田清雄)刊

二一

二五五一 明治廿四年

→源語童噺(佐佐木弘綱)

五七

同 同

佐佐木弘綱歿

同 同

積善館本源氏物語湖月抄(猪熊夏樹)刊

二一

同 同

日本文學全書本源氏物語刊

三三二

二五五二 明治廿五年

似而非源氏(下野遠光)刊

九三

二五五三 明治廿六年

漢譯「紫史」(川合次郎)刊

九四

二五五六 明治廿九年

紫式部(綠亭主人)刊

一一三

二五六二 明治卅五年

清少納言と紫式部(梅澤和軒)刊

一一四

二五六四 明治卅七年

新編紫史(増田千信)第十卷刊

九三

二五六六 明治卅九年

訂正源氏物語抄刊

六二

同 同

源氏物語梗概(長連恒)刊

七一

同 同

紫文摘英(本居豊頼)刊

八四

明治時代

一八一

一八〇

同	同	家庭新詩源氏物語(溝口白羊)刊	一一九
同	同	源註餘滴(石川雅望)附索引刊	二六
二五七一	明治四十四年	源氏物語大意(尾上登良子)刊	七二
同	同	新釋源氏物語(藤井紫影、沼波瓊音、佐々醒雪、 笹川臨風)第一卷刊	九三
同	同	獨譯源氏物語 (miller ja Busch) 刊	九五
二五七二	明治四十五年	新譯源氏物語(與謝野晶子)第一卷刊	九三
同	同	清少納言と紫式部(梅澤和軒)刊	一一四

大正、昭和時代

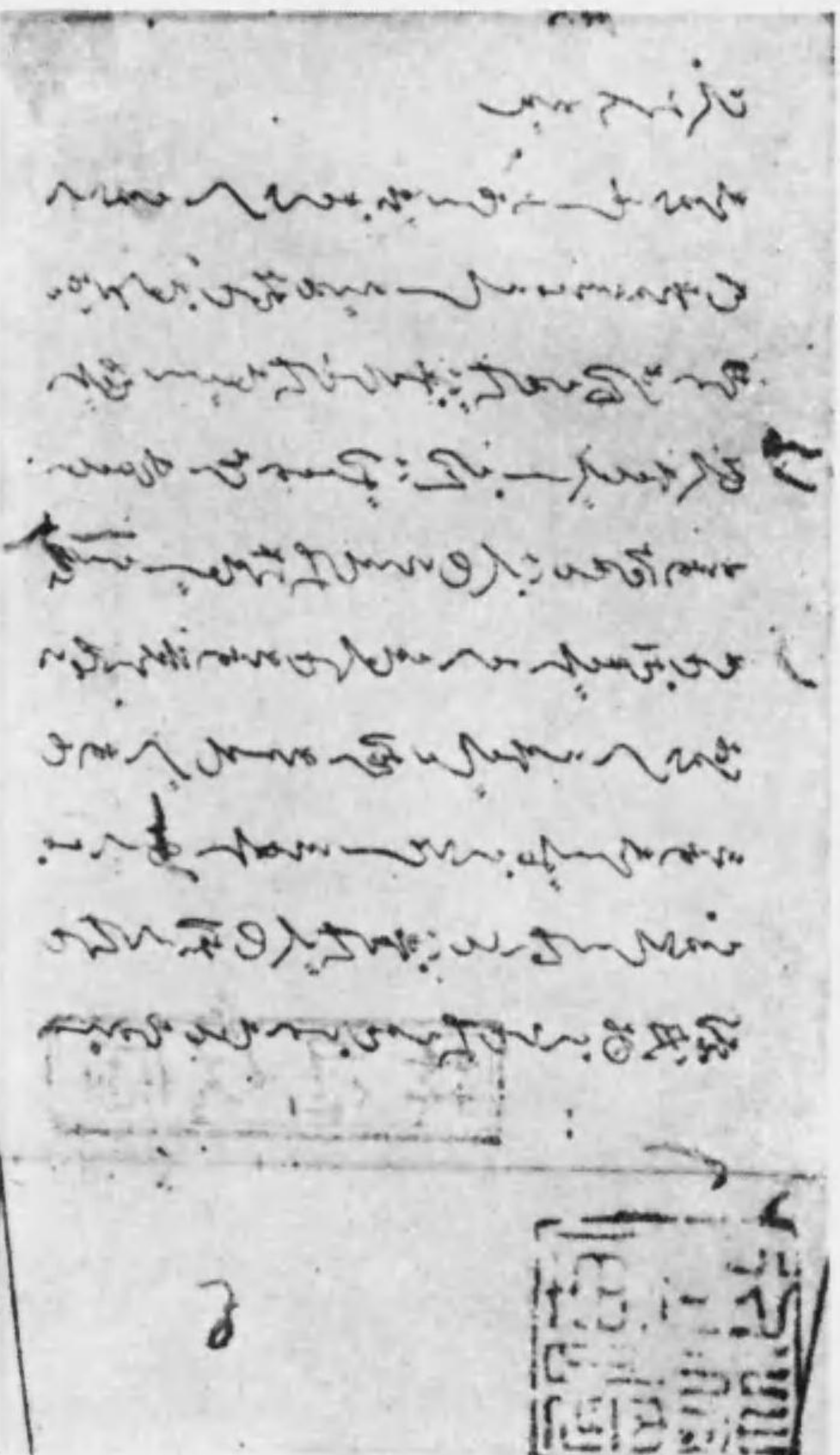
大正 同	大正元年	國文叢書本源氏物語刊	三二
二五七三	大正二年	新譯源氏物語(與謝野晶子)第四卷刊	九三

二五七四	大正三年	新釋源氏物語(藤井紫影、沼波瓊音、佐々醒雪、 笹川臨風)第二卷刊	九三
同	同	有朋堂文庫本源氏物語刊	三二
二五七五	大正四年	源氏物語(窪田空穂)刊	七二
同	同	新譯源氏物語(坪内孝)刊	七二
同	同	源氏物語須磨明石(沼波瓊音)刊	九四
二五七六	大正五年	源氏物語詳解(池邊義象、鎌田正憲)刊	二九
同	同	通俗源氏物語(小山龍之輔)刊	七二
二五七七	大正六年	光源氏の一生(高須梅溪)刊	一一二
二五七八	大正七年	源氏物語情話(吉井勇)刊	七三
同	同	新釋日本文學叢書本源氏物語刊	三二
二五八二	大正十一年	源氏物語(梗概)刊	七三
二五八三	大正十二年	縮譯源氏物語(島田退藏)刊	七三

源氏物語研究書目年表

同	同	新編源氏物語詳解(二之宮英雄)刊	一八六
同	同	源氏物語綱要(藤田德太郎)刊	三〇
同	同	源氏物語精粹(沼澤龍雄)刊	七四
同	同	頭註對譯源氏物語(宮田和一郎)第六卷刊	八四
同	同	國文學講座源氏物語講義(岩城準太郎)刊	九四
同	同	增註源氏物語湖月抄下卷刊	三三
二五八九	昭和四年	集註源氏物語新考(永井一孝)刊	二一
同	同	源氏物語講義(高橋刀川)刊	三一
同	同	昭和口譯源氏物語(長柄忠子)刊	七五
同	同	源氏要覽(鈴木文子)刊	一〇二
同	同	博文館叢書本源氏物語刊	三三
二五九〇	昭和五年	對譯源氏物語講話(島津久基)刊	三九
同	同	定本源氏物語新解(金子元臣)下卷刊	二九

同	同	紫式部と清少納言(須崎邦武)刊	一一四
二五九一	昭和六年	新講源氏物語(小室由三)刊	三一
同	同	新譯源氏物語刊	七五
同	同	源氏物語號(月刊日本文學)刊	一一二

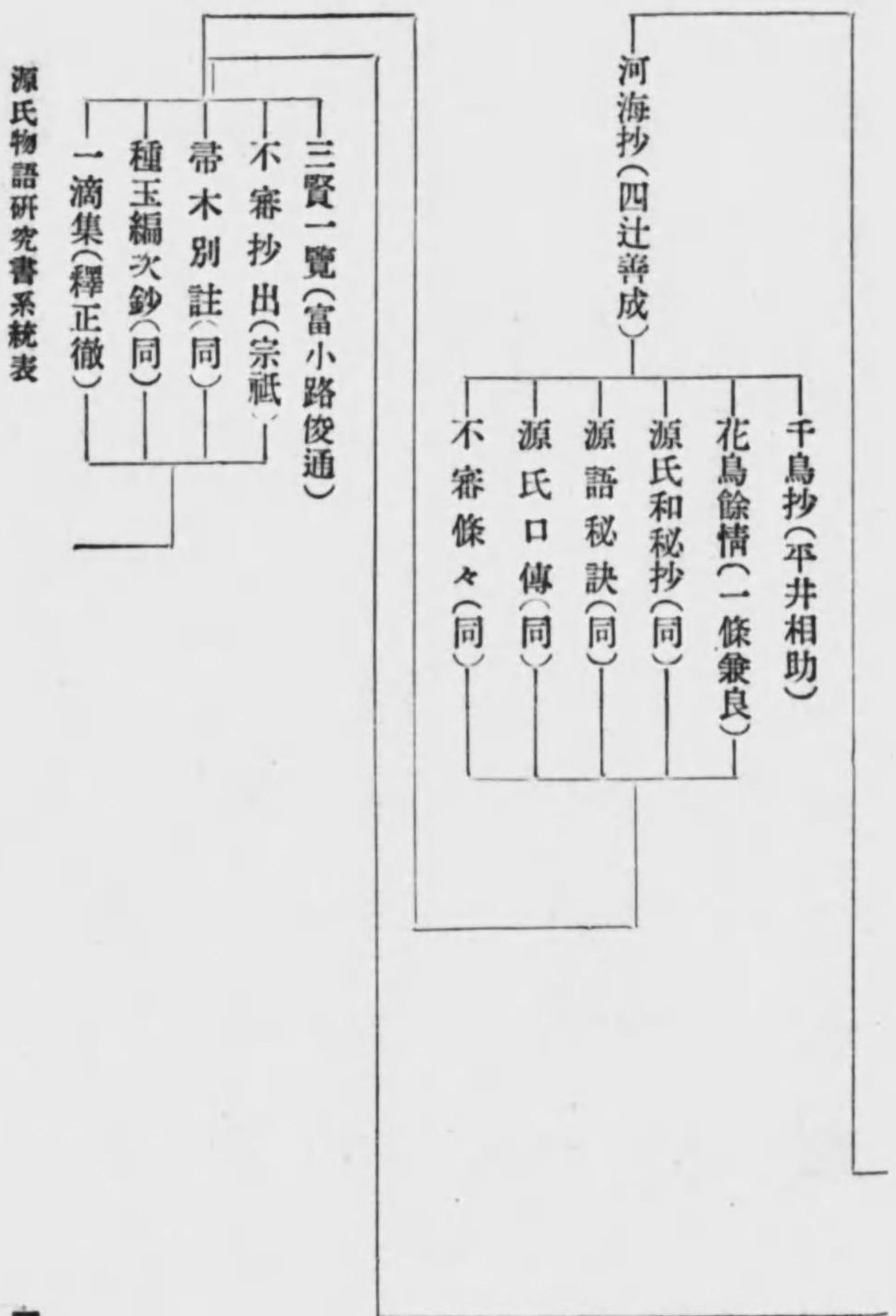
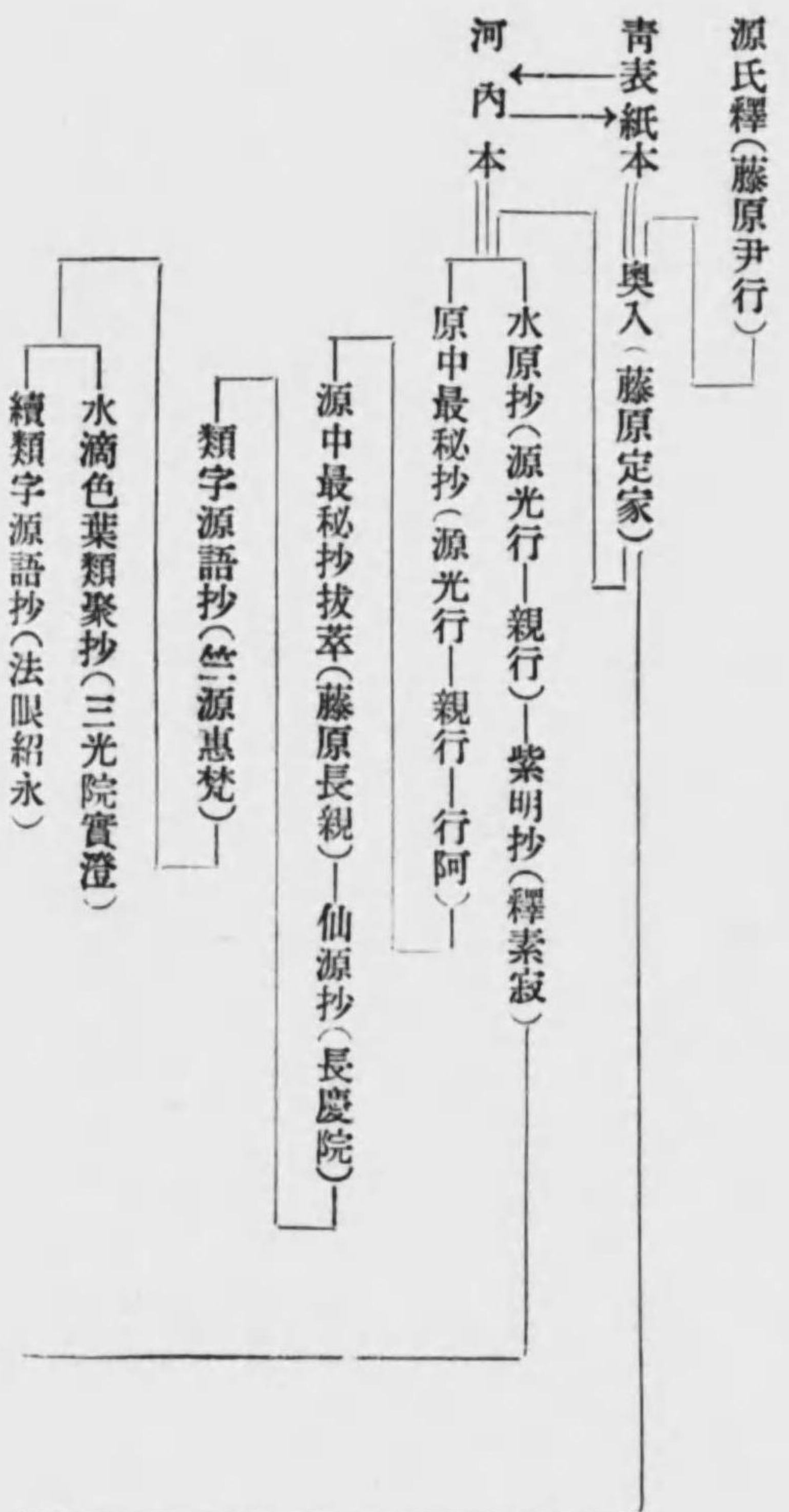


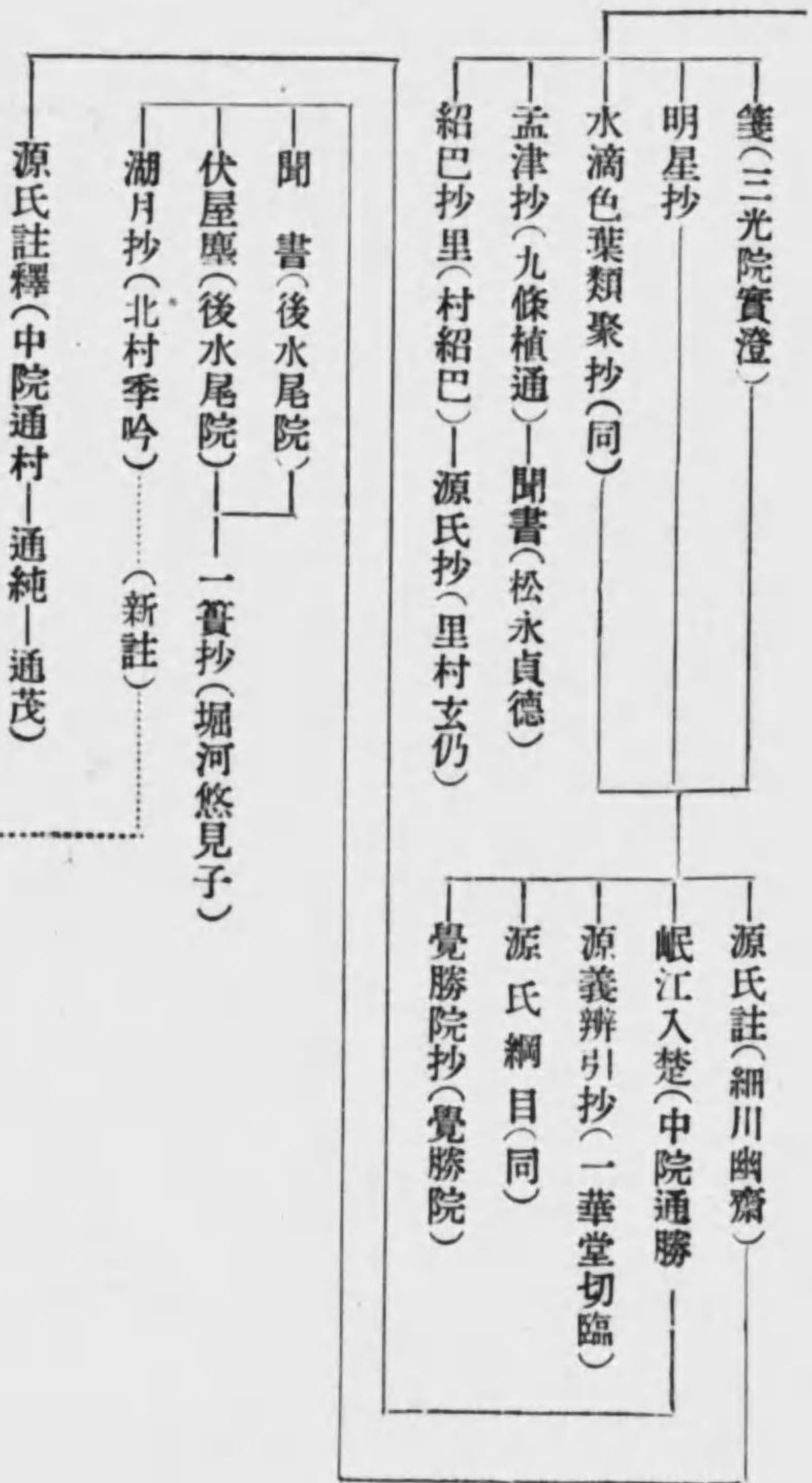
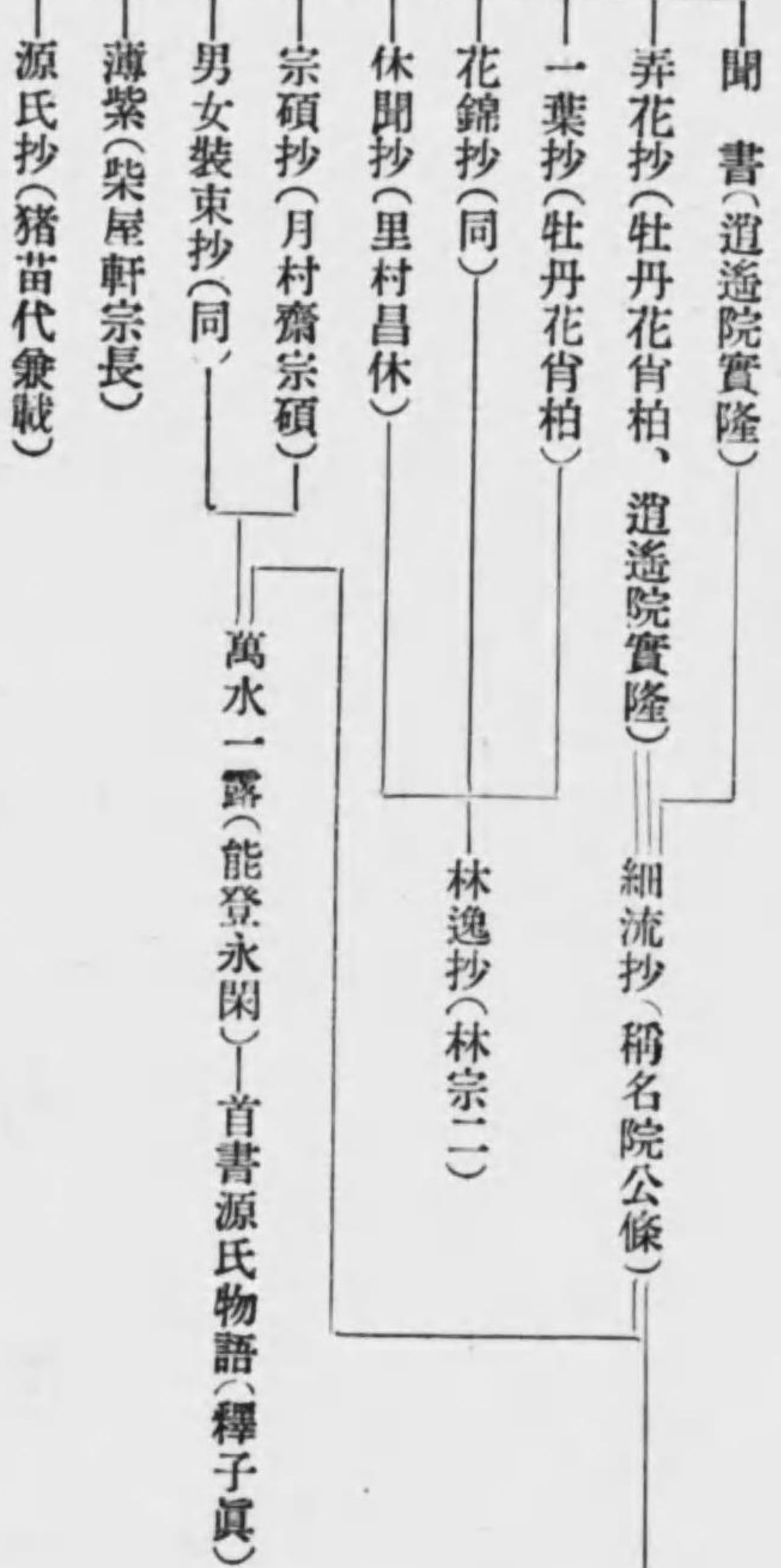
(版年三安慶) 源氏源

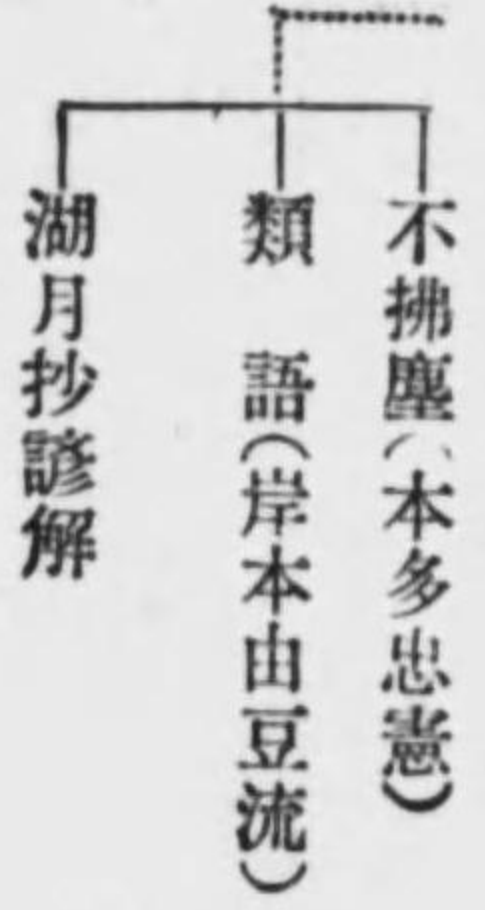
源氏物語研究書系統表

此の表は、師承を主とし、引用書を参考として作ったのであるが、勿論、その関係はかく單純なものでなく、複雑な連關があるもので、安易にかうした表に頼るべきではない。詳密正確な註釋書の關係圖や系統圖は、いまだ作るべき程に研究が進んでゐないので、従つて信憑するに足るものはいまだ作られてゐないのである。これは、最も綿密な源氏物語諸抄大成の仕事が完成した後に、結論としてかうした系統表が作られるべきであらう。今はたゞ極めて常識的な、大まかな推論のもとに假定的に此の表を作成したのである。本書の書目の中、極く僅かより此の中に入つてゐない。

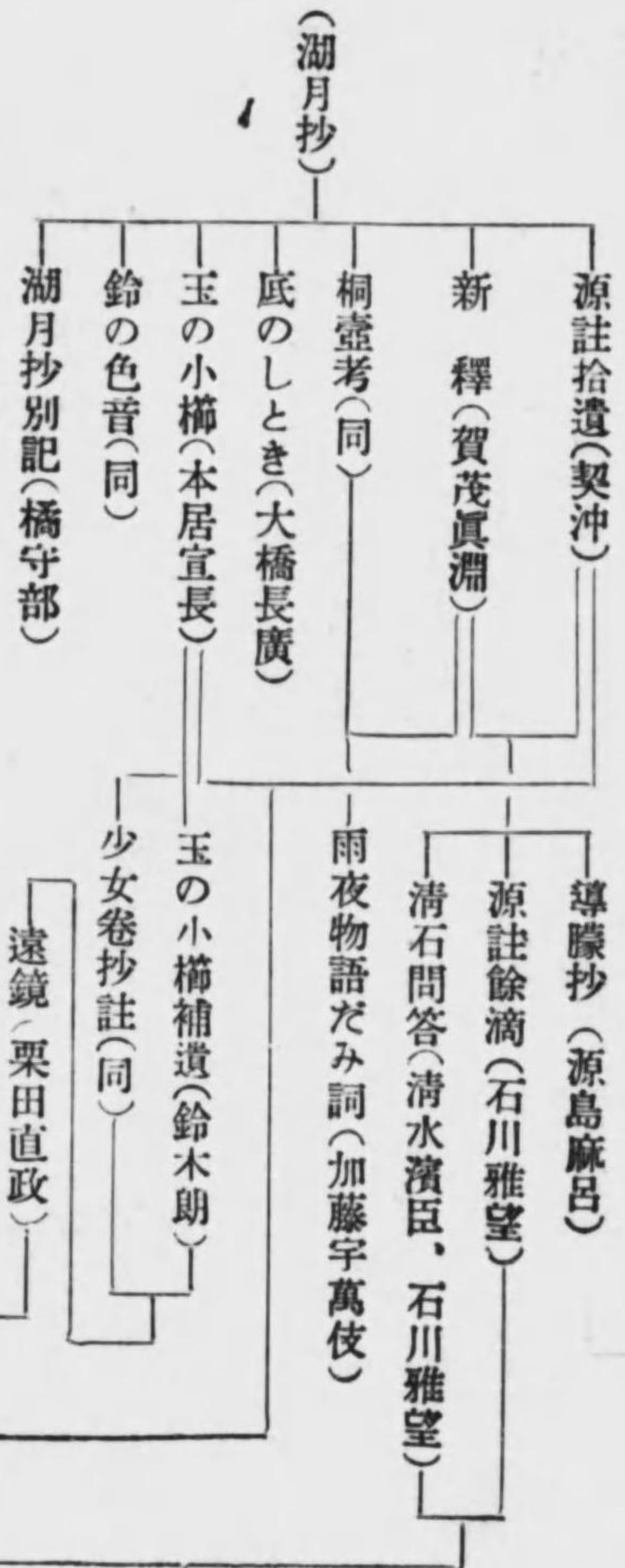
舊註系統表







新註系統表



索
引

書名索引

一、五十音順に發音の通りに配列した。延音はう^〇に、ぢ^〇、づ^〇、の類は、じ^〇、ず^〇に入れた。皆この例にならふ。又、葵は「あおい」に、帚木は「ほうきぎ」と讀んだ。皆此の例にならふ。

一、原書の讀方の不明なもの、二通りに讀まれるものなど、皆適當に讀んで、各の箇所に入れた。雨夜談抄は「うや」と讀まずに「あまよ」と讀み、岷江人楚は「みんごうにつそ」と讀まずに「びんこうにつそ」と讀んだ。以下、何れも此の例に従ふ。

一、書名以外のものが若干入つてゐる。年表、系圖をはじめ、浮世草子、讀本等が、それである。これらは別に事項索引を作るべきであるが、便宜上此の中に

含めた。なほこれに属するものを、本文中から選び出すと、古淨瑠璃、貳本の類が他に數項あるが、今は重要ならざるものは省略した。

一、頁數の中、ゴヂツク活字は、特にその書名が獨立してゐるか、重なる解説がその頁の箇所に記されてゐるか、異名同書なる事を示す場合か、それらの必要上より、特に區別する爲めに、これを示したものである。

一、「源氏」又は「源氏物語」と云ふ名を、書名の頭に冠したものは、これを省略した。——と線を一本引いたものは、その書名の上に「源氏」の二字を加へ、——と二本引いたものは、「源氏物語」の四字を加へて見るべきである。

但し、此の名を除く事の出来ないもの、たとへば「源氏物語の」などと、手仁平波で結んだ書名の場合は、その全部を出した。此の例にならつて書名を検索すべきである。

一、書名の頭にある○印は特に重要な書、又は注意すべき書、便宜な書等である。

あ		い・わ	
葵の二葉	一一〇	伊行釋	三・四
青表紙本	二九	——彙言	五七
——明石物語	八八	伊勢源氏十二番女合	一〇七
安居院聖覺法師源氏供養誦文之記	一一二	伊勢物語	四四・一〇七
——麻袋	五八	——一簣抄	二三
東鑑	四四	一條禪閣兼良公御秘作附錄	四四
雨夜閑話	一一〇	一條禪閣口傳	四二
——雨夜抄	一一・二二	一禪附錄	四四
雨夜談抄	三四	一通之切紙	四六
○雨夜物語だみ詞	三五	一滴集	七・九
阿波國文庫の目録	五	一滴抄	七
		——一部のうちにすぐれたる事	一〇八
		——一部連歌可用詞	七七

お・を

○大鏡	六・六三・六四・六五・六六・六七
六八・一〇四・一〇五・一一〇・一一五	
—大繩井入楚拔書	一四二
おきつなみ	一一六
○——奥入	三
—をさながたり	七〇
○をさな源氏	六九
—押繪鑑	一三一
○少女卷抄註	三六
佛源氏五十四帖	一三六
—音樂の事	八〇
温故知新抄	二二
—御抄	二〇

御談義

か

—御談義	六
—解	一〇八
—解	二〇
—解釋	二〇
改正源氏物語年立圖	一〇〇
○——外傳	二二
—解帶木卷	三五
花屋抄	一四・一〇六
—河海花鳥抄出	七
○河海抄	四・五・七・八・九・一一・一二
—一四・一五・一七・二三・四五・六七	
—一〇四・一〇五・一〇六・一一七	
河海抄類字	五

雅言

雅言	五六
—覺	一〇
覺勝院抄	一〇
覺性院抄	一〇
雅語纂解	五六
—飭抄	八六
—歌集	一一七
雅情濃粧源氏物語	一三五
—可睡齋秘書	四三
雅俗繪源氏	一三四
—歌註	一三四
—花鳥口傳抄	四三
—花鳥芳囀	一〇九
○花鳥餘情	七・八・九・一一・一二・一三
—一四・一五・一七・二六・四四・四	
—五・五一・六七・一〇五・一一七	

花鳥餘情別勘

花鳥餘情別勘	四二
—活釋	二九
家庭新詩源氏物語	一一九
家庭叢書	一一四
—家傳抄	一四〇
—假名文章	六七
加茂真淵全集	二三
雅遊漫錄	一一二
河内本	二九
—觀字帖	三一
○——官職故實秘抄	八六
—官職私考	八六
—願文	一一二
—卷名歌ノ序并註附昌伯源氏註	一一四
○——卷名和歌	一一三
—官名和歌	一一五

源氏集	六一	源語纂解	五六
源概抄	六一・六七	源語參註	二五
源義辨引抄	一九	源語集註	二四
——研究	一一三	源語抄	二二
源鏡草	六一	源語消息	八一
源偶篇	五三・五四・五五	源語裝束抄	八五
源語	七〇	源語圖抄	一三八
源語奥旨	一一一	源語斷錦	八二
源語會讀抄	三七	源語註	七七
源語花錦抄	七七	源語爪印	五三
源語雅言解	五六	源語梯	五五
源語歌集	四九	源語提要	一〇四
源語歌集	一一八	源語童諭	五七
源語歌鈔	一一七	源語秘訣	四二
源語古鈔	五四・五五	源語秘訣	四三
	三	源語秘訣校正	四七

源語秘訣抄	四二	源氏の歌	一一七
源語部類	八一	源氏のおこり	一〇五
源語問答	八六	源氏の義	一〇八
源語類詞	五八	源氏之詞拔書	八一
源語類字	五六	源氏之雜說抄物	六
源語類字抄	五〇・五一	源氏の註小鑑	六一
源語類集	四九	源氏の名寄の舞	一二六
源語類聚抄	五九	源氏の物語のおこり	九八・一〇四
源三知抄	一八・七八	○源氏物語	三・一九・三二・六〇・五一・五
源氏	一一三		二・六九・七〇・七三・七四・
源氏君昇進及源氏和歌	七八		七五・九八・一〇〇・一〇四・
源氏君夕霧におきて給へるやう	七八		一〇七・一一一・一一五・一一
源氏雲浮世畫台	一三六		九・一二五・一二六・一二七・
源氏香の圖	一三六		一二八・一三〇・一三二・一三
源氏後集餘帖	一三六		六
現時五十四帖	一三六	源氏物語	六四

源氏物語研究書目要覽

源氏物語	七一	原中最秘抄	四・四九
源氏物語	七二	○源註拾遺	三三・二四・五五
源氏物語	七三	源註餘意	一三九
源氏物語	七四	源註餘滴	二六・四七
源氏物語	九四	源通釋抄	一四三
○源氏物語	九五	源附秘抄	一四一
○源氏物語	八七		
源氏物語と日本庭園	四二		
源氏物語之内十五ヶ條目錄事	四四		
源氏物語之内不審條々	六四		
源氏物語のおこり	八〇		
源氏物語之詞并歌抄出	一一二		
○源氏物語の新研究	一一三		
源氏物語について	四六		
源氏物語他四種秘傳	七六		
源鈔	六		
源註			
		乙	
		考	二七
		號	一一三・一二三
		○弘安源氏論義	一一二
		梗概	四一
		講義	七一
		講義	二八・八三
		講義	三一

講義	三三	國華	一一一
考古書譜	一一一	國語講義錄	三三
光彩	八二	國語國文の研究	三三
講釋	二〇	國語と國文學	一一二・一一三
講釋開書	六	國朝書目	五・一一・一七
講釋開書	二〇	國文學研究會講義錄	三三
講釋開書	一三七	國文學研究叢書	一一二
考證釋圖	三〇	國文學講座	三三
校註源氏物語	八九・九〇	國文學全史平安朝篇	七五・一一二
紅白源氏	六八	國文學註釋叢書	一七・二二・八六
綱目	七一	國文全書	二一
綱要	七四	國文叢書	三二・一〇〇・一一一・一一三
綱要	六三	國文註釋全書	五・七・一〇・一七・二二・二
○小鑑	一九・六〇・六一・六二・六三		
○小鑑	六九・一三二		
古今集	四一・五二	國名百韻	一一六
古今集要語	五二	湖月抄	一五・二一・二二・二三・

書名索引 (け・こ)

抄解	六二	情話	七三
○ 詳解	二九	昭和口譯源氏物語	七五
掌故	一一九	蜀山抄	一五
—— 紹旨無外題	六四・六五	書札指南大全	一二二
—— 抄出	七六	—— 諸抄大成	三〇・三一
—— 抄箋	一七	—— 諸抄年月考	一〇二
—— 裝束文化考	一三八	—— 支流	一一〇
—— 消息文集稿	八二	—— 事類	五七
○ 掌中源氏物語	五五	新河海	一四三
掌中源氏物語系圖	一〇一	—— 新講	三九
掌中源氏物語年立	一〇一	新講源氏物語	三五
掌中源氏物語年立	一〇一	○ 新釋	七五・一一二
抄之抄	一〇三	—— 新釋	二二三・二四・二五・三四
昌伯源氏註	二二四	新釋源氏物語	九三・九四
肖柏問答抄	四四・八六	新釋日本文學叢書	三二・七五・一一三
紹巴抄	一三		

新橋姫物語	九〇	水原抄	四・八六・一二四
新板源氏繪鏡	一三三	水源抄	一三・八六
新編源氏物語詳解	三〇	水原錄	一五
○ 新編紫史	九三	水滴色葉類聚抄	五一
新譯源氏物語	七二	—— 圖抄	一三七・一三八
新譯源氏物語	七四	—— 鈴の色音	二五
新譯源氏物語	七五	—— 須磨明石	九四
○ 新譯源氏物語	九三	○ 葦草	一〇〇・一〇一
新譯國文叢書	七二		
尋流抄	一六		
す			
—— 水月抄	一四〇	清雅源氏物語	一三四
水原紫明抄	四	—— 正誤	五二
水源紫明抄	一三	清少納言と紫式部	一一四
		○ 精粹	八四
		清石問答	四七

清濁	五二	先入抄	三五
清風抄	一四一	先入御抄	三五
世界名著梗概叢書	七三	千年山集	一一三
世界名著叢書	七三	淺間抄	六三・六四
世界名著物語	七二	全譯王朝文壇叢書	九四
說	三四	全譯源氏物語	九四
折衷	一四一		
節用集	五九		
箋	一〇・一七・一一七		
選	七五		
○仙源抄	一四・四九・五〇・五一	綜合日本文學全史	七五
仙源抄抄出	五〇	草子	一一一
仙源類聚抄	五〇	草子繪	一一一
禪閣御説	五一	相助聞書	一一一
選釋	三三	叢書科本	八六
詮抄	一七	宗碩抄	一一三
		早大講義録	三三

増註源氏物語湖月抄	二一	大意	七二
増訂本居宣長全集	一〇六	大意抄	二六
總評	九三	大意の事	七一
續群書類從	六・三四・四六・五〇・一〇五	大概	一〇六
俗解源氏	一二六	大概抄	六二
俗解抄	八九・九〇	大概	六九
俗言附	九〇	大綱	六五
續類字源語抄	二七	大綱之事	六五
素源仙傳抄	五〇	大全	六五
そのしとき	一四三	大日本歌書綜覽	一三九
底の玉藻	二二	大日本史	一二八
素寂釋	一一一	○對譯源氏物語講話	一四
其委紫の寫繪	四	大略	三九
	一三六		六五・一一五

隆能源氏	一三〇	註	八
橘守部全集	三六	註	一六
王璽井卷末絹配	二八	註	一九
玉椿	二五・四八	註解	五一
○玉の小櫛	二一・二四・二五・二七・七一・九九・一〇一	註釋	一一八
○玉の小櫛補遺	三・二五	註抄	二〇
玉の御須磨流	五六	調度抄出	一七
爲進本	七	珍書刊行會叢書	八〇
探海鈔	一四二	珍本全集	九一
談義	六		八九
ち			
千鳥	六		
千鳥抄	六・一〇五	追註加	七三
		通俗源氏物語	三

通俗源氏物語	九二	提要	六三
通俗源氏物語	九三	提要	七三・七四
通俗叢書	七二		
藤篋冊子	一二七		
壹葦	一〇六		
爪印	五一・五三	遠鏡	九二
爪印	五九	藤花集	七七
徒然草	四四	○頭註對譯源氏物語	九四
つれづれ草三箇條の傳	四六	導蒙抄	二四
て		童蒙抄	一四〇
		童諭	二七
		獨文	九五
		獨譯	九五
定家卿釋	三	土佐日記見聞抄	一〇四
帝國文庫	八九	土佐日記舟の直路	三六
訂正源氏物語抄	六二	年立	三一
○定本源氏物語新解	二九・七五		

〇——年立	九六	——名寄文章	一一三
——年立	九七	——雜儀抄	一一三
——年立考	一〇二	——雜語抄	三五
——年立私考	一〇一	南朝長慶院源氏御抄	五八
——年波草	七〇	——男女官職事類私考	八六
——吐屑鈔	一四〇	——男女故實秘抄	八六
		〇——男女裝束抄	八五
な			
長雄源氏かな文章	一二三		
中院之御流源氏物語傳來圖	一四三	二儀源流圖	一四二
——名寄圖	九九	——二十卷抄	一三
——名寄圖考	九九	——諺紫田舎源氏	一一二
奈良繪本	六一・一三一	日本紀御局の考	一一二
奈良繪本源氏物語	一三一	日本書紀	一一三
——名寄文	一二三	日本精神史	一一三
		田舎源氏を見よ	一一三

日本文學講座	八九・九〇・一一三	〇——年紀考附年立圖說	九九
日本文學史	九五	——年表	七二・七三・八四・一〇〇・一〇一
日本文學全書	三二	——年譜	三〇
日本文學大系	三二・六九・七五・一〇〇		
女訓百人一首教鑑	一二三	は	
		俳諧源氏	九一
		——博文館叢書	三二
——拔書	六五	——箱入日記	一〇六
——拔書	七八	——八景	七九
——拔書	七八	八洲文藻	四一・一一一・一一二・一一三
——拔書	八一	——拔萃	八三
ね		——花いどみ歌目付	一一六
		——不拂塵	五五
年紀考	二四	〇萬水一露	一一二・一一一・二六・一〇三
		萬水一露抄	一一二

書名索引 (と・な・に・ぬ・ね・は)

萬有文庫	七四	引歌	一一七・一一九
ひ		引歌	一一九
光源氏	六六	秘義抄	一〇四
光源氏一部歌詞	六三	秘訣	四三
光源氏一部之謔并詞	六三	秘訣三箇大事拔書	四六
光源氏勸用集	六八	秘事	四二
光源氏系圖	九八	秘書	一二四
光源氏の一生	一一二	秘抄	九・一七
光源氏物語竟宴之會	一二五	秘抄	一二四
光源氏物語系圖	九七	秘抄	四九
光源氏物語抄	四	秘傳書	六一
光源氏物語大意	一〇四	秘傳抄	三
光源氏物語秘曲	四二	秘傳錄	一四二
引歌	一九	人々の心くらべ	一〇七
		ひとり言	六

ひとりごと	一〇九	鈔江入楚別記	一七
鄙詞	九二	ふ	
雛鶴源氏	八九・九〇	風葉和歌集	一一八
〇 紐鏡	一一一	風流源氏物語	八八・八九
百人一首	一一六	風流略源氏	一三四
百人一首	一一八	舞樂香の書	八〇
百人一首五歌の秘訣	四六	藤裏葉解	三八
〇 百人一首錦織	一三四	不審書	三七
〇 評註	二一・二七	不審抄	四二
〇 表白	二二	不審抄出	四五
〇 表白	二二・三三	不審條々	四四・四五・八六
〇 表白文章	一一	不審條々	四四・四五
〇 鬘鏡	一一三	伏屋塵	四六
〇 岷江入楚	一〇・一七・二〇・一四三		
岷江入楚鈔	一七		

扶桑拾葉集	六三	帯巻	三九
二藍源氏	一二八	帯木巻の註	三七
佛文	九五	外の大事	三四
賦光源氏物語詩	一二五	牡丹花老人開書	四六
文の覺	六二	發句繪入源氏道芝	四四
文學思想研究	一一三	發端開書	三二
蓋源抄	一一	補訂源氏物語系圖	一〇五
辨	〇〇	卷歌	一〇
辨	〇	卷次第文字鎖	一五
辨疑書目錄	一四三	卷次第文字鎖	二二
	一七	卷之歌	二七
	五五	卷々詞	八一
	一四三		

卷々略肝要	一四二	無名草子	一一三
増鏡	一二四	紫式部	一四
松風の註	三八	紫式部源氏かるた	一三六
末書	六六	紫式部と清少納言	一四
松屋叢考	四八	紫式部日記	一三
み		め	
三十幅	二二	名著文庫	六九・一一三
道しるべ	六九	目安	五一
都の辰巳	九〇	も	
〇明星抄	一〇・一七・一八・一一七	孟津集	一一
		孟津集執要	一一
		孟津抄	一一七
無外題	六四		

書名索引 (ふ・へ・ほ・ま・み・む・め・も)

目案	五二・一〇三	譯準綺語	九五
目次	五九	八雲神詠五妙傳	四六
木芙蓉	六〇	山路の露	一九・三〇・六二・六七・七二
目録	五八	大和繪鏡	一三三
目録	六一	大和詞	五四
目録	五九	大和言葉大成	五四
目録長歌七五之文字鎖	一一二	大和言葉卷	五四
目録の和歌	一一三	やまと叢誌	四七
目録の和歌	一一四	大和物語	四四
藻鹽草	六六	有朋堂文庫	三二・七五
文字ぐさり	一一二		
文字鎖	一一三		
文字鎖	一一三		
本居宣長全集	二四・一〇六		
物語拔歌	一一八		
百瀬源氏名寄	一一二		

祐倫抄	一一四	要覽	一〇二
ゆかりの詞	七一	餘釋	二七
ゆづり葉	一一六	よみくせ	五二
夢路の秋草	一一一	讀本	九一・九三
よ		ら	
宵のもしび	三六	濫觴	一〇四
要解	六七・一二三	濫觴無底抄	一七
謠曲	一一二	り	
謠曲評釋	一一一		
要文抄	六二	俚諺解	二七
揚名考	四八	吏部彩管	一四二
揚名介考	四八	略章	六三
揚名介事	四八	林逸抄	一四
揚名問答	四八		

列傳衣配	二・一二三	二八
ろ	八・九・一〇・一一・一二・一三・一四・一七・五一・一一七	六
○弄花抄		
―六帖抄		
わ		
―和歌		七八
―和歌		一三三
―若草源氏		八九・九〇
―若草源氏		九〇
―和歌源概集		六一
る	五五 五六 五七 五八 四九 四九 五〇 五一 一三七	
れ	二〇・四六・五四・七九・一二	
類語	五五	
―類語	五六	
―類語	五七	
―類語	五八	
―類語詳解	四九	
類字	四九	
類字源語	四九	
○類字源語抄	五〇	
類字源語抄	五一	
―類聚抄	一三七	
列聖全集	二〇・四六・五四・七九・一二	

―和歌集	一一六	三七・五六・五七・九一・一〇〇
―若竹	一四三	一四四
―和歌秘抄	一二四	一一三
―和歌秘傳抄	四三	一二六
―若紫抄	三八	一三三
―和漢字抄	一四三	一三六
―和漢源氏	一三六	
―和秘抄	七・九・二六	
補遺		
上方	二五	
源氏の題	一二六	
源氏物語と宮廷生活	一一三	
―號	三七・五六・五七・九一・一〇〇	
國書刊行會	二六・四七	
國語と國文學	三七・五六・五七・九一・一〇〇	
このはな帖	一四四	
日本文學聯講	一一三	
―使用談	一二六	
―道芝	一三三	
書名索引 (る・れ・ろ・わ・補遺)		二二三

人名索引

あ

Arthur Waley 九五
 安居院聖覺 一二一・一二二
 安居院澄憲 一二一
 足利義尙 四三
 足利義持 六〇
 足代弘訓 五七
 飛鳥井榮雅 六七・一二四
 飛鳥井雅綱 七六
 飛鳥井雅春 七六
 Aston 九五

敦隆

天野直方 一二六
 天野信景 三八
 荒木田守訓 五六
 荒木田久守 三九
 有賀長伯 一九
 有川武彦 二一
 安藤爲章 一一三

藤原敦隆を見よ

飯田季治 四三
 飯田武郷 三三

い・ろ

妙香寺内府家賢を見よ

家賢 八〇
 家仁親王 七五・一一二
 五十嵐力 一五・二三・三四・五二・六九
 池田龜鑑 七一・九〇・九七・一〇〇・一〇六・一〇八・一二八・一三四
 池邊義象 二九
 石井直三郎 三二
 石川雅望 二六・四七
 石川誠 三九
 石田元季 三一・九二
 石出常軒 二一・一〇六
 石野廣道 三四・一四〇
 石橋眞國 三七
 伊勢貞丈 一〇九
 磯田湖龍齋 一三四

一華堂切臨

一花堂乘阿 一九・六八
 一薰齋芳幾 一九
 一條兼良 七・一一・四二・四三・四四・四五・六四・八六・九六
 一條家 九六
 一條前關白 一條兼良を見よ
 一條禪閣 一條兼良を見よ
 一條冬良 八・四二・四八・九六・一〇三
 一筆庵主人 一三五
 一勇齋國芳 一三六
 一陽齋豊國 一三五
 猪苗代兼載 六・一四・一〇三
 井上頼母 一四一
 猪熊夏樹 二一
 今川範政 五・六三

岩城準太郎	三三	大内左京亮	七
上田秋成	三五・七一・一二七	大内左京大夫政弘	七
白杵梅彦	九二	大内持世	六
右大臣道嗣	四八	大内義弘	六
歌川豊國	一三六	大島雅太郎	一一・九一・一三四
梅澤和軒	三〇・一一四	大橋長廣	二二
榎並隆璣	五八	尾形月耕	九三・一三六
		岡田稔	三一
		岡田宗賢	一一
		岡本保孝	二七
		奥村政信	八九・九〇
		小倉博	三九
		尾崎雅嘉	二四・二五・四五
		尾崎八雅	四六
		おせう	六二
		小田清雄	二一

尾上登良子	七二	賀茂眞淵	二三・二四・二五・二六・三四
尾上八郎	二一	川合次郎	四七・九九
小山田與清	五・四八・五九	川上静庵	九四
覺勝院	一〇	觀意	七六
葛西因是	一一〇	菊池三契	九五
可睡齋	四三	きし女	九〇
荷田春滿	二三	岸本由豆流	五六
勝熊	一二五	義俊親王	一一五・一二六
加藤字萬伎	三五	北尾重政	一三四
金子元臣	二九・七五	北村季吟	二一・六二
兼良	一條兼良を見よ	北村湖春	六九
鎌田正憲	二九	北村久備	一〇〇
鎌垣春岡	六二		

人名索引 (い・う・え・お・か・き)

城戸千楯	九二	葛西因是を見よ	一八	黒川眞頼	二五・一三一
木下順庵	一八	九二	黒澤翁滿	五九・一一七	
休文	四	九二	桑原如則	九二	
行阿	一〇三	九二	Gundert	九五	
堯惠	九二				
玉蘭齋貞秀					
九條禪閣		九條植通を見よ	淡齋英泉	一三五	
九條植通	一一・四六・一二五		契沖	二二・二三・二四・二六・五三	
窪田空穂	七二		慶福院花屋玉榮	一〇五	
熊澤蕃山	二二		月村齋宗碩	三・一三・二六・八五	
倉野憲司	六・一三				
栗田直政	九二				
黒川春村		淺草庵春村を見よ	五井純禎	五四	
			耕雲山人		
				藤原長親を見よ	

香蝶樓國貞	一三六	齊藤彦麿	五八・一二七・一二八・一三九
興隆	一四一・一四二	嵯峨帝	一一三
後光明院	一一二	笹川臨風	九三
小島宗賢	三三	佐佐木信綱	二二・二七・五三・五七・五八
小杉相郎	三三		七四・一〇一・一〇五・一〇九
後西院	二〇・二三	佐々木弘綱	一一七・一一八
小中村清矩	九三	佐々醒雪	二七・五七
近衛殿	九	里見義	九三
小林榮子	二九	里村玄仍	一四〇
小林元有	九二	里村昌休	一三
後水尾院	二〇・二三・四六・一二三	里村昌巴	一一
小室由三	三一	里村昌伯	一二四
小山龍之輔	七二		
後陽成天皇	一二二		
權大納言兼胤	七八		
近藤芳樹	一一一		

人名索引 (き・く・け・こ・さ)

實枝	三光院實澄を見よ	三三・七三
實澄	三光院實澄を見よ	三九・七五・一一三
三光院實澄	一〇・一一・一七・一九・四一	一二七
	四六・五一・七六	三七
三條公教	龍翔院を見よ	四七・九九・一二七
三條西公條	稱名院公條を見よ	九三
三條西家	五〇	一二六
三條西實澄	三光院實澄を見よ	一〇
三條西實隆	逍遙院實隆を見よ	五〇
鹿田文一郎	二五	五〇
竺源惠梵	五〇・五一	七・四四
子眞	二一	四一・六一・一二六
柴屋軒宗長	一三・七六	牡丹花宵柏を見よ

稱名院公條	九・一一・一三・一八・一九・四二・一二五	一一四
尙友軒月叟	一一三	二五・三六・九二
逍遙院實隆	八・九・一〇・一一・二二・四一・四五・四六・五一・九七	二八・八三
蜀山人	二二	一〇二
心敬	六	九四
心前	一二六	一三二
水月庵	一〇九	一二八
末松謙澄	九三・九五	一四三
菅原種文	五六	一二八
相月徳翁	六	
資矩	三五	
須崎邦武	一一四	
鈴木朗	二五・三六・九二	
鈴木弘恭	二八・八三	
鈴木文子	一〇二	
鈴木正彦	九四	
鈴木信賢	一三二	
青雲亭光海	一二八	
節住堂	一四三	
淺草庵春村	一二八	
宗祇	七・八・九・一二・一八・三四	

人名索引 (さ・し・す・せ・そ)

宗碩	四四・四五・九七・一一七・一二四
宗長	月村齊宗碩を見よ
宗牧	柴屋軒宗長を見よ
素兄堂	一二
素寂	六九
祖能	四・五
尊俊	一二六
太平館若本	七六
高須梅溪	一二八
高田宜和	一一二
高野辰之	一一七
高橋刀川	三一
多賀半七	九一
瀧澤良芳	三〇
建部綾足	九一
橋純一	三六・四七
橋たか女	一一〇
橋守部	三六・四七
伊達齋宗	一二七
田中大弐	一五
田中保之	七一
谷川千喬	二四
近松茂岳	四七
千種庵諸持	二八

千葉葛野	三九
千村仲雄	三六
長慶院	四九
長連恒	三三・七一
月岡丹下	一三五
壺井義知	八五・八六
坪内孝	七二
鶴峯戊申	九二
手塚昇	一一二
寺井重房	一三五
寺町三知	一八
田拾女	六一
藤翁	六七
洞院實熙	八六
藤華宋央	九六
藤月亭	三六
富樫廣蔭	五八・七一
徳川義親	一三〇
土佐光起	一〇〇
土佐光信	一三〇
土肥經平	一〇九

人名索引 (そ・た・ち・つ・て・と)

富小路俊通	八・四五	中村孫兵衛	四二
智仁親王	八一	中山美石	三六
外山英策	八七	那賀山鹿城	六二
豊原國周	一三六	長柄忠子	七五
		成島司直	六九・一二七
な		に	
永井一孝	三〇・三一・三三	新納忠元	一二
中井竹山	五五	西川祐信	一三四
中澤臨川	七二	西澤仲舒	一〇
中院家	五二	西道智	六八
中院通勝	一七	二之宮英雄	三〇
中院通純	二〇		
中院通村	一九		
中院通茂	二〇・二二		
中野貞利	一三八		

沼波瓊音	九三・九四	畑中盛雄	五七
沼澤龍雄	八四	服部菅雄	八二
の		塙保巳一	一二七
能登永閑	一二	林國雄	一三九
野々口隆正	一四〇	林道春	一〇二
野々口立圃	六八・六九・一三二・一三三	原富太郎	一三一
は		搬柴	一〇四
梅翁	八九・九〇	伴資矩	一一三
萩原宗固	三五	久明親王	四
萩原廣道	二七	菱川師宣	一三三
橋本稻彦	八三	一柳千隠	一二七
長谷川春雅	四六	鎌屋立圃	野々口立圃を見よ
		日野直麿	一四一
		ひ	

人名索引 (と・な・に・ぬ・の・は・ひ)

平井相助	一〇〇	六
平田篤胤	一〇〇	六
藤井乙男	八九・九〇・九三	
藤井紫影	四七・六一・一一三	
藤井高尙	七五・一一二	
藤岡作太郎	七四	
藤田徳太郎	三	
藤原敦隆	五	
藤原伊行	三・五・六八・一一三	
藤原定家	一一三	
藤原祐之	一一三	
藤原隆親	一一三	
藤原隆能	一三〇	
藤原爲家	四・四九・五〇・六〇	一二五
藤原俊成	三六	六一
藤原長親	三六	
藤原則之	三六	
冬良	一條冬良を見よ	
Florcz	九五	
放鶴道人貞市	二六・三六	
細井貞雄	二五・四八	
細川幽齊	一六・一七・一二四	
牡丹花宵柏	八・九・一四・二六・四四・七七・八六・九七	
堀田倉子	五六	
堀河悠見子	二三	

堀内昌郷	一一〇・一一一	
本多忠憲	五五	
前田家	三・四・一八・一一七	
昌成	六九	
益田孝	一三〇	
増田于信	九三	
松井簡治	三七・五六・五七・九一・一〇〇・一二四	
松井文正祐孝	一三四	
松浦静山	一二七	
松岡明義	一一七	
松岡行義	八六・一三七	
松平榮子	一二七	
松永貞徳	一二・一八・四六・一二五	
三浦圭三	七五	
溝口白羊	一二・一六・一八・二四・二八	
三矢重松	三五・五三・八二・八三・一〇三・一一四・一二六	
源嶋萬呂	二四	
源忠韶	二八	
源親行	四	
源具顯	四一	
源匡平	一一	
源光行	四	
箕形如庵	二一	

人名索引、ひ・ふ・ほ・ま・み

都の錦	八八	め	
宮田和一郎	三三・九四	明鏡	藤原長親を見よ
Müller ja Busch	九五		
妙香寺内府家賢	四九		
村上影面	三七	も	
紫式部	一〇五・一〇九・一一四・一二五	物集高見	七三・七四
村田士觀	村田春海を見よ	本居内遠	一〇二
村田たせ子	一二七	本居大平	三六
村田春雄	一三九	本居豊顯	八四
村田春海	一〇四・一一〇	本居宣長	二四・二五・四七・九九・一〇六
村山春豊	一三六	森嘉基	二五・一〇〇
		や	

安田躬弦	一二七	よ	
山岡元隣	一四〇	横山由清	一〇一
山口剛	一一二	與謝野晶子	七四・九三
山崎敏夫	三二	吉井勇	七三
山田常典	一〇〇・一〇一	吉澤義則	二一・五〇・六一・九四
山本春正	一九・六〇・九八	四辻善成	五・六
山本正臣	一三八		
山陽毅	六一	り	
		李園主人	一三六
有住齋	一三七	龍翔院	六・七
祐倫(祐倫)	一二四	縁亭主人	一一四
遊行上人	六八	臨江齋紹巴	紹巴を見よ
		林宗二	一四

人名索引 (み・む・め・も・や・ゆ・よ・り・る・れ・わ・補遺)

る	Reyon	九五	堅田侯 仙臺少將齋宗 太宰衛門 橋十蔵	一二七 伊達齋宗を見よ 七四
れ	靈元院	五四・七八・八一		
わ	渡邊康映 和辻哲郎	八五 一一三		
補遺				

後記

高等學校時代の三年間、澤潟久孝先生が國語の時間を受け持たれて、私達は、その御講義をきいた。一年の時は、馬琴の弓張月だった。實に面白くなかった。と云ふのは、勿論、先生の御講義が面白くないと云ふ意味ではなく、弓張月そのものが面白くなかったのだ。その時から私は馬琴に反感をもつてゐた。貸本屋の書物で勉強した舊時代の人々ならいざ知らず、今時の若い者で馬琴などに好意を持つ人のあり得よう筈がない。その頃、私は創作をやりたいと思つてゐた。それで翻譯書や文藝書により多くの親しみを持つてゐたし、同人雑誌を出したり、學校の雑誌に小説めいたものを掲げたりした。

中學時代から、友人の感化で、短歌や詩を作る事に興味を覚えてゐた。さうして、萬葉集位

は是非通讀したいものだと思へた。高等學校の入學記念に書店で買つたのが、佐佐木先生の萬葉集選釋である。所が、丁度、高等學校の一年の時に、萬葉集古義の豫約募集があつたので、古義を購入して、一月に一冊づゝの割合で、二年近くもかゝつて此の浩翰な書物を讀み通した。これが、専門的に書かれた國文學の註釋書に接した最初であつた。

二年の時は枕草子であつた。私は、武藤元信の通釋を古本屋で求めて、これに春曙抄を参照して、ともかくも、此の古典の全部を通讀した。此の頃、多少國文學に對する専門的な興味がわいて來た。賀茂眞淵全集、續いて本居宣長全集を、買ひ入れたのも、その頃だつたと記憶する。

三年の時は源氏物語と萬葉集とであつた。源氏物語を、積善館本の湖月抄で、三年の初夏から、夏休みの終りまでかゝつて、全部を通讀した事が、卒業期の迫つて來た私に對して、帝大文學部の國文科を選ばせた原因であつた。さうして、その事が遂に私の將來の方向を決定させてしまつたのである。私は、高等學校の三年の終り頃から、小説を書かなくなつた。寧ろ、小説が書けなくなつた——さうして、卒業の記念に買つたのが、早大で出した萬葉代匠記である。

萬葉集と源氏物語とが、私の生涯の方針を決定させたのだ。澤鴻先生は、此の二つの古典に對して、最も深い理解のもとに、その頃の私どもにふさはしい導きを與へて下さつた。さうして、遂に私は國文學の古典からはなれる事が出来なくなつた。萬葉集に對する愛着は、やがて私を歌謡史の研究に向はせた。なぜなら、萬葉集の本當の精神は、平安朝以後の和歌ではなくして、歌謡の中にこそ、その傳統されてゐる事が見出されるからである。その故に、今も私は、いや將來も、歌謡史の研究をもつて、自らの専門となして居り、且つ、なすであらう。併し、源氏物語を通じて得た、物語小説への愛好の念も、私は捨て去る事が出来ないのだ。その爲めに私は、平安朝文學に對する研究とか、或は小説史に對する嗜好からさへも、はなれる事が出来なかつた。だが、私の研究心、向學的精神は、その頃も今も、常に動搖してゐる。それは、自己の學識に對する絶えざる疑念の爲めであり、且つ又、學問と云ふものと、自己の曝露、人間性の解放と云ふ事が、一致しない事に對する不安からでもある。それが爲めに、私は時として再び創作をおもふ事があり、生活の改革を考へる事もある。結局、私にはいまだ信念が足りないものであらう。學問と生活との全的融合が、私の解決したい一つの大きい問題なのである。

横道へそれたが、かくして、源氏物語の研究は、私の過去の生活の中、ある時代の學的興味
の、一つの焦點ともなつてゐた。私は今日でも、萬葉集の研究に對する興味から強く誘惑を受
けるが、源氏物語への愛着の念は更に一層深い。それで今まで、備忘の爲めにノートに取つた
覚え書の中でも、源氏物語に關するものが最も分量が多いのである。私の最初の著書「源氏物
語綱要」は、かくして成つた。その附録としてつけた、参考研究書目は、私の最も時間と精力
とをかけた報告である。その後も私は絶えずその増補訂正を心がけて、見聞した新しい材料は
常に注意深くノートしておいた。月刊日本文學の源氏物語號に、その増補訂正したものを、前
半だけ掲載した。それは、さきの解題に較べると、それよりも簡明で要領を得る事を旨とした
爲めに、解説の文章や内容は簡略で短くなつてゐるが、書名に至つては、甚だ増加してゐるの
である。併し、故あつて、その後半は掲載を見合せる事になつた。さうして、私がさきに出し
た「國文學棟説」の中に、その全部をさし加へようと思つてゐた。所が、これ又、同書の分量
が可成り多くなつた上に、此の原稿をも加へる事になると、一層全體の量が増加するので、こ
れだけは別冊にしたいといふ書肆の希望であつた。私はそれを躊躇した。なぜなら、種々なる

文稿の間に此の原稿が入るのであるならば、此の不充分な解説も、他の原稿と持ちつ持たれつ
で、互ひに支へあひ、或ひは短所が相殺せられる事によつて多少とも意義があるであらうが、
單行する程の價值があるかどうか疑ひなきを得なかつたからである。私は、自らその缺點を知
つてゐる。

だが、書肆の方では、既にその出版の準備を始めたと云ふ。私としても、折角の原稿を此ま
ま葬つてしまひたくない。かくして、遂に私は本書を別冊として世に公にする事に心を定めた
のである。私としては、全く意外な結果であつた。併し、一面それは幸ひでもあつた。不充分
とは云ひながら、年表や索引を付ける事によつて、本書の活用や、源氏物語研究史の一面や、
ひいては、國文學研究史の上にも、明かとせられる所が多くなり、可成り單行の意義を持つに
至つたからである。でも、不十分な點はあくまでも不十分である。その間、折口信夫博士の御
好意で、故三矢重松博士の舊藏書や、遺稿を調査する事を得たのは、私にとつて、實に感謝に
絶えない恩恵であつた。此の調査の結果を加へる事によつて、本書は一層面目を新にし、光輝
を加へて、單行の意義をも一層深める事が出来たからである。殊に、嘗つて私は、三矢博士の

講演を承り、その源氏物語に関する藏書の展観を拜見した事があるので、一層感銘の深いものがあり、追懐の情が切であつた。同博士の源氏物語研究が途中で挫折し、遂に完成を見るに至らなかつた事は、何と云つても、我々後學の遺憾に耐へない所である。

本稿の他にも、本稿の餘業と見るべき二三の文章を公にした。「源氏物語綱要」の基となつた、雜誌國文教育連載の「源氏物語の構想」や、同じ雜誌に載せた、「源氏物語梗概書目解題」及びその「補遺」があり、又「國文學襍説」に收めた、「源氏大鏡と三帖源氏と十二帖源氏と源氏淺聞抄」や「俳諧源氏と田舎源氏」等がそれである。前者は雜誌書誌に掲げたものを増補し、後者は雜誌國語と國文學に掲載したものである。

私は、右の源氏淺聞抄について、輕率な間違をした。源氏物語の研究の先輩として、私が種種恩恵を蒙つてゐる宮田和一郎氏の、源氏淺聞抄に関する紹介を、先に、月刊日本文學に載せた「源氏物語研究書目解題」では、肯定して、その解説を用ゐさせて頂いたのに、「國文學襍説」の追記では、輕々にそれを否認した。同氏からの御注意で、私の思ひ違ひが明かとなつた。即ち、本書に解説した所が正しいのである。私は宮田氏に謝さなければならぬ。本書にも問

違ひが少くないであらう。或漏に至つては無數にあるであらう。それはかうした性質の書物としてやむを得ない事で、何人といへども完璧を期する事は出来ないものである。ただ、今後も絶えざる注意と、好意ある注告とをまつて、増補訂正したいと思つてゐる。かう云ふ種類の研究は、多數の協力をまたなければ、到底不可能な事である。

今源氏物語の完全な研究に志して居られるのは池田龜鑑氏である。同氏は、古書の藏備に於ても聞えてゐる。古典の註解は、多く前書後書相受繼いで、同じ説を傳統してゐる。又、異名同書の多い事も、古い註釋書を見る場合に、往々學者を混迷させる事がある。これらの點が明かにせられる事によつて、國文學研究史の跡が餘程明瞭となるのである。つまり傳統を跡づける事によつて、同時に、新しい個性の存在をも見出す事が出来る。然るに、此の傳統の跡を調査する爲めには、最も綿密な科學的探究の方法が企圖せられなければならない。斯う云ふ種類の註釋史の研究に手が付けられなければならないのに、今までそれが世にあらはれてゐないのである。池田龜鑑氏が、源氏物語の研究史の側に於て、それを志して居られる。その研究が完成し、公にせられた暁には、ひとり源氏物語のみならず、國文學研究の上に於ても、大きい光

明をもたらす事であらう。その際には、本書の如きは、太陽の前の星の如く、不要に歸する事であらう。ただ本書は、さうした暫定的意味ばかりでなく、浩瀚な研究に對するハンドブックとしても、存在の意義はあるであらうと思はれる。併し、本書の如き種類の調査は、池田氏の如き學者にお任せした方が安全である。私には自らの行くべき道が開けてゐる。さうした意味で、本書は、私の過去に於ける此の種の調査報告の、一つの清算であると云つてもよい。

かうしたある種の古典に對する書目解題の書はもつと出てもよい筈であるが、案外に少い。ただ萬葉集については、木村正辭博士の「萬葉集書目提要」や佐佐木先生の「萬葉集研究書目解題」の如きがあり、最近は萬葉三水會編纂の「萬葉集研究年報」の如きが出てゐる。日本書紀や源氏物語や伊勢物語や古今集の如きも同種の書が出てよい筈である。(尤も、萬葉集や日本書紀や平家物語の諸本に關する研究報告には別に權威のあるものがあり、最近平安朝の古典以下、方丈記や徒然草等の諸本、註釋書についても、さうした研究の企圖せられてゐる事は私は知つてゐる)。かうした研究調査は、ある一部の人の考へる如く、容易なものでなく、勿論不必要なものでなく、一面から云へば、最も重要な且つ困難な研究である。従つて、それ／＼の

専門學者の周到な調査にまたなければならぬ。私は、此の書をもつて、さうした方面の先驅と誇る心持はないけれども、礎石の一つとしたいと云ふ念願は持つてゐる。さうした意味に於ても、本書を世に送る事は無意義でないやうにも思はれる。勞多くして、わりに功の少い此の種の仕事に、請ひ願はくば、博く世の學者の同情と理解とを得たいものである。

源氏物語研究書目要覽〔完〕

昭和七年三月十五日 印刷
昭和七年三月二十日 發行



源氏物語研究書目要覽
定價金貳圓五十錢

山本製本印刷株式會社製本

著作者 藤田德太郎

發行者 鹿島佐太郎

東京市神田區南甲賀町八

印刷者 宮崎喜三郎

東京市日本橋區通三丁目三

東京市神田區南甲賀町八

發行所 六

文館

電話・神田(25)二八〇〇番
振替・東京七八八四八番



■ 六 文 館 國 文 學 書 ■

臺北帝大教授 安藤正次 著

考

— 第三版 —
▼菊判本文四三六頁
▼特クローリス装函入

定價參圓五十錢
(書留送料二十一錢)

浦和高校教授 藤田徳太郎 著

國 文 學 襍 說

— 新刊 —
▼菊判本文四〇六頁
▼寫眞版口繪八葉

定價參圓五十錢
(書留送料二十一錢)

文學博士 清原貞雄 著

國 學 發 達 史

— 新刊 —
▼菊判本文四二二頁
▼クローリス装函入

定價參圓
(書留送料二十一錢)

成蹊高校教授 阪口玄章 著

思想を中心とした

中世國文學の研究

▼菊判本文三二六頁
▼クローリス装函入
定價貳圓五十錢
(書留送料二十一錢)

福岡高校教授 安田喜代門 著

平安朝和歌史の研究

近 刊



終

